

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	英米倫理思想の研究遍歴の回顧と展望 : 60年間を振り返って <研究論文>
Author(s)	行安, 茂
Citation	HABITUS , 18 : 33 - 43
Issue Date	2014-03-20
DOI	
Self DOI	10.15027/39021
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039021
Right	
Relation	



英米倫理思想の研究遍歴の回顧と展望

－60年を振り返って－

行 安 茂

(岡山大学名誉教授)



1. 私の大学院時代と修士論文のテーマ

私は1954(昭和29)年3月岡山大学(教育学部)を卒業後、広島大学大学院文学研究科修士課程に進学し、森滝市郎教授のもとでイギリス倫理思想を学んできた。当時、研究室は「独逸倫理学」と「英国倫理学」の二講座から構成され、山本幹夫(空外)教授と森滝市郎教授とがそれぞれ担当し、その下に小倉貞秀助教授、永野羊之助助教授がおられた。助手は河野真先生でした。森滝・山本両先生からは筆舌に尽くし難い多くの学ぶべき指導を受けたことは忘れられません。また、小倉・永野・河野先生、さらに式部久先生(教養部)からも温かい指導を受け、七年間の大学院時代を快適に送ることができました。

さて、私は研究の対象をH.シジウィックの*The Methods of Ethics*(1874)とし、その倫理学体系に考察の焦点を置いた。彼は、周知のように、J.S.ミルの功利主義から強い影響を受けながらも「自己犠牲」に疑問をもち、J.バトラーの「合理的自愛」に注目する。私は当時シジウィックがどのような問題意識と方法論とによって分析し、推論してゆこうとするかを理解することができず、孤独の中で悪戦苦闘していた。研究室では森滝先生だけがイギリス倫理学の研究者であったが、先生は原水爆禁止運動のリーダーとして次第に国内外で活躍されるようになり、落ちついて研究の相談に対応する時間的ゆとりを持っているようには見えなかった。私は1955(昭和30)年秋、東北大学で開催された日

本倫理学会で発表して以来、イギリス倫理学の研究者を知ることができ、交流を深めることができてきた。私は孤軍奮闘しつつシジウィック研究を一応まとめ、1956(昭和31)年1月末ごろ修士論文「英国倫理の社会的政治的構造」を主論文とし、副論文として「第19世紀英国思想界に於けるシジウィックの位置」と「H.シジウィックの政治学に於ける諸問題—主として倫理学との交渉を中心として—」を提出した。

2. 博士課程の研究テーマと博士論文の作成

博士課程に進学してから私は修士論文を反省し、研究対象をシジウィックからT.H.グリーンへと軌道修正した。疑問点は二つあった。第一はシジウィックの快樂主義は果たして善を基礎づけることができるかということであった。第二は自己の善と他人の善とが対立するとき道徳的判断の基準としてどちらを採用すべきであるかということであった。グリーン自我実現論はこれらの疑問に答えてくれると予想されたので、私は1956(昭和31)年9月からグリーンの*Prolegomena to Ethics*(1883)の本格的研究に着手し、広島大学図書館にこもってその分析と理解に毎日集中した。1961(昭和36)年4月から私は京都女子高等学校に就任して以後は公務多忙であったが、学位論文を清書した。幸いに、翌年6月から半年間、私学研修福祉会の国内研修員として広島大学文学部倫理学教室に留学したので、この期間を学位論文の作成に活用した。当時、旧制広島文理科大学の博士論文と新制度の博士論文とが並行して審査されていた。院生の間では新制度の博士論文の審査は文学部が最も厳しいという噂が広がっていた。文学研究科の院生たちは論文のレベルや提出時期について不安を抱いているように見えた。私は博士論文「グリーンにおける自我実現の研究」を1963(昭和38)年9月に完成し、400字詰原稿用紙903枚(上、中、下巻)を三部製本し、同年11月初旬に提出した。私はこの論文作成には自信をもっていた。

論文の最終試験は1965(昭和40)年2月20日(土)、森滝教授の研究室において実施された。山本教授は以下のような趣旨の言葉を述べられた。「新制度の博士号は倫理学の教室では君が第1号である。君は今後も研究をつづけこの論文を完成してくれるものと信じている。君の大成を期待している。」文学研究科の院生全体の中で最初に論文を提出したのは故千代田寛君(西洋史学専攻、私より一学年下の後輩)であり、研究科の中では私は第2号であった。

3. オックスフォード大学(ベリオル・カレッジ)への留学とデューイ研究への道

私はかねてよりベリオル・カレッジへ行ってグリーンのMSS(遺稿)を調査し、研究を完成したいと考えていたところ私学研修福祉会の在外研修員としてサバティカル(1972-1973)が与えられたので、訪英の機会を得た。ベリオル・カレッジのマスターであるC.ヒル博士の紹介により私はグリーン研究の第一人者・リヒター教授(ニューヨーク市立大学)とナフィールド・カレッジ(オックスフォード)で会い、昼食を共にしながら有益な情報を得た。彼からA.J.ミルン教授(ベルファスト大学)、W.H.ウォルシュ教授(エジンバラ大学)、A.M.クウイントン教授(ニュー・カレッジ、オックスフォード)を紹介され、これらの諸教授に会い、最近のグリーン研究の動向を知ることができた。ミルン教授は1987(昭和62)年8月30日、岡山市の「カルチュアホテル」で講演(「T.H.グリーン倫理政治論における共同善と権利」)をした。

オックスフォード滞在中、B.G.ミッチェル教授(オリエル・カレッジ)に会ったことは私に問題意識を喚起させた点で最も印象的であった。教授は私の研究リスト(英語)を見ながら「なぜあなたは日本の思想家を研究しないのか」と質問をした。この質問は帰国後、日本の思想家を可能な限り研究することの大切さを強く認識させた。もう一つ開眼させられたことはJ.デューイと

グリーンとの関係を検討する必要があるということであった。1972年12月初め頃、アメリカの南イリノイ大学のS.M.エイムズ教授から一通の手紙がオックスフォードの私の宿舎に届いた。その内容は1973年4月23日(月)、南イリノイ大学へ来て講義をしてくれ、というものであった。日本出発時にはアメリカ行は計画になかったが、エイムズ教授の折角の招待状に応えることはグリーン研究を広げる機会になると判断し、承諾の返信を送った。若きデューイは1890年前後恩師のG.S.モリス教授と共に*Prolegomena*を読み、討論し、考えていた。デューイはその頃グリーン批判の三論文を発表し、道具主義の必要性を認識し始めていた。私はブラックウェル書店からデューイの『哲学の改造』(1920)を購入し、上記三論文と共に読み、「グリーンとデューイ」と題した原稿(約12,000字)を作成した。

4. 南イリノイ大学での講義

私がエイムズ教授との知己を得たのは以下のような経緯によるのであった。1969(昭和44)年頃、佐伯君(福井大学助教授)から『デューイ初期全集』が近く刊行されるとの情報を私は得た。エイムズ教授はこの全集編集助言者の一人であり、その第三巻の「序文」を書いた人である。私はこれを一読し、若きデューイがグリーンから影響を強く受けていることを再認識した。私は読後感とコメントを含む手紙を彼に送った。彼は1972(昭和47)年6月12日から15日まで岡山を訪問し、私に会いたい意向の手紙を同年4月初めに送ってきた。私は同年5月1日に日本を出発し、オックスフォードへ行くので会うことができないが、私の家族が最大限のホスピタリティをもって歓迎する旨の返信を彼に送った。

以上のような交流から私は南イリノイ大学を訪問することになった。エイムズ教授は4月21日(土)に、Center For Dewey Studiesへ案内し、Boydston所長を紹介した。彼女は日本のデューイ研究者(長田新、岸本英夫、永野芳夫)の生死

について尋ねた。エイムズ教授は私が南イリノイ大学を訪問した最初の日本人であるといった。彼は、まず、私に講義は日本語、英語のどちらによってされるかを尋ねた「英語です」と答えたところ、原稿を見せてくれ、というのでそのコピーを渡した。私の講義は4月23日(月)19:00-21:00であった。掲示板には私の氏名、所属、題目を記した紙が貼付されていた。受講生は約30名(大学院生外教授等数名)。1時間の講義、1時間の質疑応答。質問はデューイの宗教、グリーンのデューイへの影響、デューイにおける詩と科学等に関するものであったが、グリーンについてはエイムズ教授以外には知っている人はいない印象を受けた。デューイの宗教と禅について台湾出身の留学生が質問したのが印象的であった。

5. 「グリーン没後100年記念会議」と「T.H.グリーンと現代哲学」の国際会議に出席して

1982年9月、私はオックスフォード大学(ベリオル・カレッジ)において開催された「グリーン没後100年記念会議」に出席した。この企画運営委員長のA.ヴィンセント(カージフ大学)に会い、彼がグリーンの研究思想の研究者であることを知ったことは大きな刺激となった。また、ヘーゲルの政治哲学の研究者・Z.A.ペルチンスキー教授(ペンブルック・カレッジ、オックスフォード)に会い、昼食を共にしながら彼の訪日計画の話聞くことができたのは楽しい思い出となった。私は彼が編集委員長をしている『大英ヘーゲル学会紀要』Spring/Summer(1985)に藤原保信教授(早稲田大学)の『ヘーゲルの政治哲学』(御茶の水書房、1982)の「書評」を掲載する約束をすることができた。ペルチンスキー教授は1985年に訪日、同年10月4日、岡山大学教育学部において「自由民主主義と哲学的観念論—ヘーゲルとグリーンとの比較—」の講演をした。

2002年9月、オックスフォード(ハリス・マンチェスター・カレッジ)にお

いて開催された「T.H.グリーンと現代哲学」の会議に出席した私は、「日本における自我実現の発展とT.H.グリーン—西田幾多郎の『人格』と善—」を発表した。この発表をしたのは、すでに述べたミッチェル教授との対談によって私は日本におけるグリーンの受容と思想家との関係を再検討する必要があることを認識したからである。当時、私は中島力造、高山樗牛、網島梁川、西田幾多郎、河合栄治郎の思想体系を研究し、彼等の思想の独創性と日本哲学の発展への貢献とを明らかにすべきだと考え、その構想を立てていた。

6. 日本イギリス哲学会の設立と『T.H.グリーン研究』の刊行

1976(昭和51)年4月ごろ、小泉仰教授(慶應義塾大学)から手紙が来て日本イギリス哲学会設立発起人になってほしい依頼があった。同年6月5日、大槻春彦会長を中心として理事が選出され、私は中国地区の代表として理事に選出された。平野耿教授(東洋大学)が総務委員長として学会の運営を担当した。本学会の事業として注目すべきことは『イギリス思想研究叢書』(第1期12巻)が企画され、御茶の水書房から1978年6月以後順次刊行されたことである。その中に私と藤原保信教授(早稲田大学)の責任編集による『T.H.グリーン研究』が含まれており、私が全体を計画し、藤原教授が政治思想の分野から日下喜一、萬田悦生、谷川昌幸の人選をし、私が野村博(倫理学)、塚田理(英国神学)、若松繁信(西洋史学)、寺中平治(哲学)、栗田修(教育学)の人選し、執筆依頼をした。本書は1982年4月に刊行された。私は理事として中国地区の研究例会を毎年岡山大学その他の大学で開催した。岡山大学では日本イギリス哲学会の研究大会を2回(1989年3月29日-30日、1996年6月30日-31日)にわたって開催した。こうした研究活動が評価されたためか、私は2003(平成15)年3月28日の総会において日本イギリス哲学会名誉会員に推薦され、承認された。

7. 近代日本におけるグリーン受容とデューイ研究

私は1973年5月にイギリス・アメリカから帰国した後、研究テーマを近代日本におけるグリーン受容とデューイ研究へと拡大した。近代日本の思想家についての初めての論文は「西田幾多郎とグリーン」(『岡山理科大学紀要』第8号、1972)であった。デューイについての初めての論文は「グリーンとデューイ」(日本倫理学会編『倫理学年報』第21集、1972)であった。帰国後は、まず、デューイの倫理思想形成を初期・中期・後期にわたって検討し、日本デューイ学会で発表等をしてきた。1986(昭和61)年10月から私は同学会の理事に選出され、現在もその常任理事である。日本デューイ学会が設立されたのは1957(昭和32)年4月2日であった。私は本学会設立50周年記念論集編集委員会の委員長に2008(平成20)年6月7日に選出された。数名の編集委員と協議し、論文を公募し、提出された論文を慎重に審査した。その結果、日本デューイ学会編『日本のデューイ研究と21世紀の課題』(世界思想社、2010)が刊行された。

日本におけるグリーン受容についての最初の研究は私と虫明弘教授(岡山大学)との共編『綱島梁川の生涯と思想』(早稲田大学出版部、1981)であった。「河合栄治郎とT.H.グリーン」(広島哲学会編『哲学』第54集、2002)は、2001年11月3日(土)、広島哲学会における特別講演「河合栄治郎における自我実現の思想の受容とその問題—T.H.グリーンとの比較において」をもとに書いたものである。こうした研究をまとめたものが拙著『近代日本の思想家とイギリス理想主義』(北樹出版、2007)である。藤田正勝教授(京都大学)から私は「西田幾多郎とT.H.グリーン」についての講演依頼(「西田・田辺記念講演会」、2011年6月4日)を受け、京大に行ったことは忘れられない思い出である。本講演は論文として『日本哲学史研究』第9号(京都大学大学院文学研究科日本哲学史研究室、2012)に掲載された。

8. 日本イギリス理想主義学会の設立と10周年記念論集の刊行

2002年9月に開催された「T.H.グリーンと現代哲学」の国際会議から帰国した私は日本のイギリス哲学の研究が主としてホッブズ、ロック、ヒューム、J.S.ミル等に集中しており、19世紀後半のイギリス理想主義の研究は軽視されていることに気づいた。W.J.マンダーも『イギリス理想主義』(2011)の中でミルからムア・ラッセルの間が哲学史上空白になっていることを指摘する。グリーンはリベラル・デモクラシーの先駆者として最近内外で注目され、その自由主義が再評価されてきた。私は院生やイギリスでPh.D.の学位を取得した若い研究者の将来を考え、同志と共に2003年7月26日、「イギリス理想主義研究会」(2011年8月の総会で学会に昇格)を設立した。そして毎年研究大会、関東・関西の各部会を開催し、『イギリス理想主義研究年報』を発行してきた。2013年8月の段階で『年報』は第9号に達した。

今年は学会設立10周年を迎えるため、その記念論集として『イギリス理想主義の展開と河合栄治郎』を昨年夏に計画し、20名の会員に原稿依頼をし、他の一人の方には原稿の特別依頼をした。本書は私の責任編集によるものであり、2014年1月30日、世界思想社から刊行される。なお、本学会は広い視野から英米思想の研究を推進し、若い研究者の育成をも目指している。

9. これからの研究計画

現在、私が構想を立てている計画が一つある。それは『近代日本の修身教育と戦後の道徳教育—自由主義の導入・挫折・再評価—』(仮題)である。私は日本道徳教育学会と日本弘道会との共同による「修身教育の研究」のメンバーとして2008(平成20)年度から2012(平成24)年度まで研究してきた。平成24年度から編集委員長として発表者10数名の論文を目下編集しているところである。私はこの研究討議を通して強く感じたことは、倫理学の視点から明治・大正・

昭和初期から現在までの道德教育の展開を再検討する必要があるということである。周知のように、道德の教科化に向けて本格的な取り組みが具体化されようとする今日、近代日本において修身教育がどのように歩んできたか、明治初期から熱心に導入された洋学から儒学への転換はなぜ起こったか、教育勅語の目的は何であったかという問題を再検討する必要がある。戦後は修身教育は停止され、13年間は道德教育は空白であったが、新しい道德教育の理想と実践を求める声が国民の中から徐々に起こってきた。こうした動向を考えると、戦時中・戦前の修身教育を再検討することは道德の教科化を軌道に乗せるためには不可欠である。明治・大正・昭和初期の修身教育の基礎は教育勅語にあったが、教育勅語の理論的根拠は何かということが学界では求められていた。教育勅語の基礎は儒学にあったが、その儒学は西洋倫理学説とどう調和するかという問題が、藤井健次郎、吉田熊次、さらに西晋一郎、深作安文らによって積極的に検討された。文部省は当時修身教育の理論的根拠をグリーンの自我実現説に求め、この説は儒教とも一致するところがあるとして歓迎され、それは昭和初期まで研究された。藤井、吉田らは自我実現説の哲学的前提に疑問をもち、デューイの経験主義的自我実現説をとり入れることによってグリーンの学説を補充した。大正期はデューイの来日等の影響もあってデューイの全人思想が受容され、教育実践に自由主義が大きな影響を及ぼすようになったが、川井訓導事件によって自由主義教育は衰退した。戦後の教育はデューイの「なすことによって学ぶ」教育によって戦前の教育とは違った指導方法を採用し、道德教育もデューイの影響を受けながら今日に至っている。以上の流れを再検討することの重要性はすでに教育現場から起こりつつあるので、私はこの機会に近代日本が歩んだ時代背景との関係において修身教育の教科書とその指導の一端を紹介しつつ、戦後の道德教育と修身教育との違いと間接的接点、さらには道德の教科化に伴う諸問題を検討したいと目下その内容を調査しながら構想している

ところである。

以上、私は大学院在学以来研究を開拓するためには内外の多くの研究者とコミュニケーションをとることが第一条件であると考えてきた。私はこうした交流によって次々とアイデアが浮かび、それによって論文や著作のテーマを発見することができた。発見したら直ちにテーマの構想を立て、できるところから執筆してきた。現在の若い院生諸君は狭い協同体に閉じこもることなく、自ら進んで多くの知己を求めて自分の世界を拡大することが大切である。そして英語によって論文を書き、内外に発表し、海外の雑誌や著作の中で引用されるところまで自己の研究水準を高めてもらいたい。20歳代の10年間の地道な勉強が将来大きく自己を伸ばす基礎であることは西晋一郎も指摘したところである。

なお一言追加しておきたいことがある。私は広島大学大学院時代、禅の指導のため「広島大学禅学会」の講師として毎月1回広島大学「清風寮」での坐禅の指導に来られていた井上義光老師(少林窟道場、竹原市)の指導を受けたことは現在に至るまで生涯の宝物であったと深く感謝している。毎日、今も3時間の坐禅をしている。老師夫妻は「動中の工夫は静中の工夫に勝る」とよく話された。起居動作がすべて心を練る教材である。私は院生時代には坐禅を軽視したこともあったが、年を重ねると共に又人間関係に悩んだとき、いつも思い出されるのは「坐禅」であった。そして「坐禅の原点に帰れ」とその重みを再認識した。その効果は論文などの執筆において如実に現われた。同時に自分の欠点もますます自覚されてきた。勝負は一瞬にある。井上義光老師は「即今を大切にするのですよ」、「今に成り切るのですよ」とわが子をさとすように常にいわれた。

広島大学大学院に進学し、私を直接指導していただいた師は三人である。そ

の三人とは森滝市郎教授、山本幹夫(空外)教授、井上義光老師である。私にとっては倫理学の研究は禅と不可分の関係にある。思えば平成11年6月4日、京大の「西田・田辺記念会」(代表藤田正勝教授)の招待により「西田幾多郎とT.H.グリーン」の講演をすることができたのは、西田哲学を解釈する力が私の坐禅により多少養われていたからである。

若い院生諸君よ、20歳代の10年間の集中的継続的勉強はその後になって必ず生きてくる。念々の今を忘れることなく、今なすべきことに直ちに全力投球してもらいたい。